

## 「学者・博士」になりたい 子ども達のために

研究代表者 大矢 裕一

化学生命工学部 化学・物質工学科 教授  
医工薬連携研究センター長



先日、某生命保険会社が毎年行っている保育園・幼稚園児と小学生を対象とした「大人になったらなりたいもの」2017年アンケートで、15年ぶりに「学者・博士」が男の子の1位になった<sup>1)</sup>との報道があった。男の子がなりたいものといえば、スポーツ選手が相場と思っていたが（事実、2003-2016年の14年間の1位はサッカー選手が8回、野球選手が6回）、この結果は、我々にとって大変喜ばしいことである。実施した生命保険会社では、学習指導要領の改訂で理科の授業の充実が図られたことや、前年までに日本人のノーベル賞受賞が相次いだことが影響したのではないかと分析している。また、女の子では、残念ながら「学者・博士」はトップ10には入っていないものの、2位看護師、4位医師、6位薬剤師と、こちらは医療関係の仕事への関心の高さがうかがわれた（医師は男の子でも4位）。医療への期待が大きいことは、これもまた、歓迎すべきことであろう。

昨年が15年ぶりだったということは、「学者・博士」は、2002年にも1位だったということである（今の大学生の年代か）。その少し前には何があったかという、2000年に白川英樹先生、2001年に野依良治先生とノーベル化学賞の受賞が連続していた。やはり大々的に報道されるノーベル賞の効果は大きいのかもしれない。2003年以後の「学者・博士」の順位を調べてみると、7、3、3、3、2、3、4、3、3、2、3、4、8、2、1位と続く。時折、順位を下けているが、ほぼ毎年5位以内に入っており、理科離れが叫ばれるなか、健闘していると言って良いのではないだろうか。子ども達は本来、理科の世界が大好きなのだ。

確かに1位は喜ばしいことではあるが、順位に一喜一憂することにはあまり意味はない。問題は、毎年少なからずいる「学者・博士」と答えた子ども達が、大人（大学生）になるまでその夢を失わずに持ち続けることができる世の中にするにはどうすればよいか、また、女の子のアンケートで「学者・博士」が上位に入るような世の中にするにはどうすればよいか、であろう。

この私立大学研究ブランディング事業の大きな目標は、もちろん研究面で顕著な成果を挙げ、その実用化への道筋をつけることであるが、大学の「ブランド」としての情報発信と周知・広報活動も重要な目的であり、それが本事業の他の研究助成制度とは異なる大きな特徴である。我々が対象として重要視しているのは、まず企業（特に医薬品、医療機器関係）と医療機関、在学生卒業生を含む学内・学外の大学関係者および研究者、続いて高校生（受験生）とその父母、それから子ども達を含む一般市民ということになるが、決して子ども達を軽視しているわけではない。一大学のブランドの周知ということはさておいても、今以上に少子化が進むことが確実な我が国において、その技術力を維持・発展させ、全ての人々が安心して生活できる社会を守るためには、将来を担う子ども達に科学・技術・医療への志を持ってもらうことは極めて重要である。そして、学問を極める面白さと社会貢献できる喜びを伝え、子ども達とその夢と希望を実現する道を進むモチベーションを持ち続けることができる世の中を作ることは、我々大学人・研究者の重要な使命であろう。

先のアンケートで「学者・博士」と答えた子ども達からは、「がんを完璧に治す方法を見つけない」「科学者になってなんでもくっつける接着剤をつくりたい」「実験で新しいことを発見してたくさんの人の役に立ち喜ばれる人になりたい」など、医療や化学に関連した夢に関する声が多くあったとも報道されている。実を言うと、私の小学生の時の夢は今の職業「学者・博士」であった（当時の作文に書いている）。本事業に関連して、今の子ども達の中にいる「40数年前の自分」に向けて、現在の仕事（研究）の魅力を発信し、将来の研究者（あるいはエンジニア、ドクター）への道を邁進してもらう手助けができれば本望である。

1) [http://www.dai-ichi-life.co.jp/company/news/pdf/2017\\_058.pdf](http://www.dai-ichi-life.co.jp/company/news/pdf/2017_058.pdf)